

演題番号：E10

## 京都府の犬及び猫における重症熱性血小板減少症候群(SFTS)ウイルスの浸潤状況調査

○宇埜麻美子<sup>3)</sup>、小寺 明<sup>1)</sup>、酒井友里<sup>1)</sup>、大石剛史<sup>2)</sup>、岡本裕行<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 京都府保健環境研究所、<sup>2)</sup> 京都府動物愛護センター、<sup>3)</sup> 京都府生活衛生課

1. はじめに：京都府では、2004年から人と動物の共通感染症サーベイランス事業として、府内を7地域に分け、計17動物病院から人獣共通感染症の発生情報の収集及び還元している。さらに積極的疫学調査として、動物愛護センターに保護・収容された動物の人獣共通感染症の病原体保有状況を保健環境研究所において調査している。2013年にSFTS患者が日本で初めて発生したことから、2016年から動物愛護センターの保護動物のSFTSV抗体保有状況の検査を開始した。その検査結果及び定点動物病院の発生報告の結果から、府内におけるSFTSの浸潤状況について一定の知見を得た。

2. 材料および方法：抗体検査は、動物愛護センターに保護された犬及び猫の血液を採取し、その血清を用いてELISA検査法によりSFTSVに対するIgG抗体を測定した。

3. 結果：2016年から2023年までに犬292頭、猫18頭の抗体検査を行い、犬8頭が陽性、猫は全て陰性であった。陽性であった8頭のうち、5頭が北部の丹後・中丹地域の保護犬であり、3頭が南部の山城地域の保護犬であった。また、定点動物病院から2018年から2024年6月までに南丹地域以北において、犬3頭、猫12頭のSFTS発生報告があった。

4. 考察および結語：府内での人のSFTSは2015年以降13件発生しており、発生地域は丹後及び中丹地域に限局されている。しかし、動物病院からは、北部地域を含め、人で未発生の南丹地域からも報告があり、さらに府南部の山城地域においても抗体陽性犬が発見されていることから、現在患者が発生していない地域も含めて、府域全体にSFTSが浸潤していると考えられた。そこで、2023年、ワンヘルスの観点で人、ペット向けにマダニの注意事項を盛り込んだ啓発チラシを作成した。併せて府医師会、府教育委員会、府庁関係課（健康対策課、自然環境保全課、農村振興課等）からなる「人と動物の共通感染症予防対策連絡調整会議」の中でSFTSの研修を行い、チラシを配布するとともに、府内の動物病院や京都府猟友会、市町村、保健所などにも配布した。今後も動物由来感染症サーベイランスを継続し、発生状況を注視するとともに、マダニによる感染症の予防啓発を続けたい。